

バルザック全集

1

東京創元社

バルザック全集 第一卷

昭和四十八年八月二十五日 發行

訳者

霧^{きり}渡^{わた}田^た山^{やま}桑^{くわ}
生^き辺^へ村^{むら}田^た原^{はら}
和^わ一^{かず}武^ぶ
夫^は夫^は倅^{けい}稔^の夫^の

發行所

代表者 秋山孝男
東京創元社

(182) 電話 東京 〇三二六八八二三一
振替 東京 一五五六五

印刷・相馬印刷株式会社
製本・株式会社鈴木製本所
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

Aug. 1973 Printed in Japan. © TOKYO SOGEN-SHA

バルザック全集 第一卷

目次

ふくろう党

献辞

第一部	待伏せ	．．．．．	セ
第二部	フーシェの策略	．．．．．	五
第三部	明日なき日	．．．．．	一七

Z・マルカス

献辞

解説	．．．．．	三二
----	-------	----

装幀 松田正久

ふくろう党

田 山 桑
村 田 原
武
俣 稔 夫
訳

商人テオドール・ダブラン氏に

最初の友に最初の作品を

ド・バルザック

第一部 待伏せ

第一章

共和国第八年ヴァンデミエールの初旬、いまの暦でいえば一七九九年九月のおわりころ、マイエンスにおもむくため、朝フージェールを發った百人ほどの農民とかなりの数の町の人間が、フージェールと、旅人の宿場になっているエルネという小さな町とのほぼ中間に位する、ペルリースの山をのぼりつつあった。この一隊は小さきさまのグループに分れていたが、そこにはじつに雑多な服装のコレクションがくりひろげられており、また、集まった人間のひとりびとりの出身地や職業といったものもじつに雑多だったから、それらさまさまな特徴を描いてみることは、当節大いに評価されている「生き生きした色彩」なるものを、この物語にそえるためにむだではあるまい。もつともある

批評家たちにいわせると、この「生き生きした色彩」なるものは感情描写の邪魔になるそうだが。

農民のあるもの（じつをいえばその大部分）は素足で歩いていた。着ているものといえば、くびからひざまでを包んでいる大きな山羊の毛皮と、ごく粗い白地のズボンだけで、しかもその生地は織糸がでこぼこしていて、この地方の織物業のなげやりの仕事ぶりをあらわしていた。彼らの長い束髪は山羊の毛皮とごく自然にまじりあい、うつむいた顔をすっかりかくしていたので、容易にこの毛皮を彼らの皮膚と思ったり、またふと見て、このみじめな人間どもと、彼らがその毛皮を服としている動物を混同しかねないほどだった。しかし、やがてこの長い髪ごしに、生いしげる草のなかの露の玉のように、彼らの目がきらりと光るのがみえる。その目ざしは、人間らしい知能のひらめきを示してはいるが、たしかによるこびよりも恐怖をあたえた。頭にはよごれた縁なし帽をのつけている。赤い毛織で、当時、フランス共和国が自由の象徴として用いていた、例のフリジア帽に似たやつである。みな節くれだった太いカシの棒を肩にし、そのさきに布製の長い雑のうをぶらさげているが、中身らしいものはない。あるものは縁なし帽のうえに、さらにつば広の粗末なフェルト帽をかぶっていたが、その山のまわりにはさまさまな色の毛虫状の毛糸飾りがまきつけてあった。またあるものは、最初の連中のズボンや雑のうと同じ生地の服で全身をつんでいたが、その服装には、新しい文明を思わせるようなものはほとんどな

にひとつなかった。長髪が上着のえりのうえにたれさがっている。その上着は円筒状をなしていて、腰のところまでしかなく、小さな四角い脇ポケットがついている。西部の農民独特の服だ。上着のまえは開いていて、その下からごついボタンのついた同じ生地（同じ生地）のチョッキが見える。あるものは木靴をはいていたが、なかにはしまつして木靴を手にもっているものもある。着古されてよごれ、汗やほこりで黒くなったこの服は、風変りな点でははじめに描いたのに及ばなかったが、歴史的価値はもっていた。というのは、一隊のまん中あたりに点々散在して花のようにかがやく、豪華とすらいえる服装の連中に移るにあたって、それは橋わたしの役を演じていたからだ。その豪華な服装だが、事実、青いズボン、二列にならんだ銅のボタンに飾られた、四角い鎧を思わせる赤や黄のチョッキ、こういったものが、仲間の白い服や毛皮のあいだにあって、麦畑のなかの矢車菊やひなげしの花さながらに、くっきりと浮かびあがっていた。ブルターニュの農民が自分で作る木靴をはいているものもいたが、大部分のものは鋌（びんぎょ）を打ったごつい靴をはき、いまなおその型がわが国の農民のあいだでうやうやしく保存されている、古代フランス風の粗いラシヤ地の服をきていた。シャツのえりはハート型や錨（いかり）をかたどった銀のボタンでとめてある。彼らの雑（ぞう）のうち、他の連中のものより中身が豊富らしく見える。さらに幾人かのは、きつとブランドーがいっぱい入っている水筒をひもでくびにかけて携帯していた。

このなかば野生の人間たちのあいだに、この地方の文明の到達点を示すかのように町の人間がいくらか姿をみせていたのである。彼らもまた農民たち同様、その服装にさまざまな特徴を示していた。丸型、山型あるいは烏打の帽子をかぶり、上が折り返しになっている長靴やゲートルで留めた短靴をはいている。およそ十人ほどは、カルマニヨルという名で知られている例の共和派の上着を、またあるものは——たぶん裕福な職人であろう——は、上から下まで同じ色のラシヤものを着ていた。身なりにもっともこっている連中は、多少ともすり切れたところのある青や緑のラシヤ地の燕尾服やフロックコートなどで人目をひいていた。この連中はひとかどの人間にふさわしく、いろいろな型の長靴をはき、いかにも逆境をものともせぬといったふうに太いステッキをふりまわしていた。入念に髪粉をつけた頭、きちんと編んで束にした髪、これらは運が向きかけたり教養がつきかけたりした人間に特有の、自分をりっぱにみせたい気持を物語っていた。まるで偶然のように集まった自分たちの姿におどろいているこの連中を見ると、火事で家から追い出されたこの村の住民のようだ。しかし、時代と場所を考えあわせると、この一群の人間はまったく異なった興味の対象となってくるのである。

当時フランスをさわがせていた内乱の実情に通じている観察者なら、この一隊のうちに、共和国が忠誠を当てにできる少数の市民の姿を、容易に見分けることができたはずだ。この一隊はほとんど全部が、四年前に共和国にさら

って武器をとった人間から成っていたのだから。さらにもう一つかなり目立った特徴を指摘するなら、この集団を対立させている意見の相違について、もはやなんら疑問の余地もなくするのである。元氣よく行進しているのは共和主義者だけだった。その他の連中は、服装こそまらちだが、顔や態度にあらわれている不幸の表情では一致していた。

町人も農民も、みな深いうれいの色をうかべている。その沈黙には何か荒々しさがあり、彼らは注意ぶかくかくしているがきつと恐ろしいものである。同じ一つの考えの重荷のもとに、身をかがめているかにみえた。彼らの顔つきを讀みとることはできない。ただ異常に緩慢な足どりが、ひそかなたくらみを暗示するだけだ。くびに珠数をかけたものが何人か目についた。破壊というよりむしろ禁圧された宗教のしるしである珠数を身につけることは、危険のおそれがあったのだが、彼らは平気で時どき髪をふりはらい、不信にみちたようすで頭をもたげる。風の方向に鼻をむけて遠くから獲物をかぎつけようとする大さながらに、森や小道や、道路の両側にそそり立つ岩などのほうをひそかにうかがう。黙々として歩をはこぶ仲間たちの單調な足音以外にはなにもきこえないことがわかると、彼らはふたたび頭うなだれ、もとのあきらめきつた表情にもどるのだった。そこで生きかつ死ぬべく、徒刑場にひかれ行く罪人のように。

さまざまな人間から成り、またさまざまな気持をあらわしているこの縦隊が、マイエンヌにむかつて行進していく。

この間の事情をかなり自然に説明してくれるのが、この分遣隊の先頭を行くもう一つべつの一隊の存在である。およそ百五十名の兵隊が、連隊長の指揮のもとに、武器と行李をたずさえて先頭を歩いていた。ところでフランス革命のドラマに参加したことのない人びとにたいして、つぎのことを指摘しておくことはむだではあるまい。この連隊長という呼称は、愛国者たちによってあまりに貴族主義的だとして廃止された、大佐という呼称にとつかわつたものだ。さてこれらの兵隊は、マイエンヌ駐在の歩兵連隊の留守部隊に所属していた。内乱当時、共和政府の兵隊はみな、西部地方の住民から《青》とよばれていた。このあだ名は共和国初期の青と赤の軍服に由来するものだが、その軍服のことはまだ記憶にも新しいから、ここで描写をこころみるまでもあるまい。その《青》の分遣隊はいま、この一群の人間をマイエンヌに護送する任務についているのだった。一群の連中はほとんどみな、マイエンヌに連行されることに不満を感じていた。そこに着けばたちまちにして同一の精神、同一の制服、そしていまはまったく欠けている画一的な態度をおしつけられるにきまつていたから。

この一隊は、ブージェル管区から、どうにかしてかき集められた徴募兵であつた。その徴募定員は、去るメッシンール十日（一七九九年八月二十八日）の法令によって、フランス共和国の總裁政府（一七九五年十月二十七日以降、フランス政府は五人の總裁によつて運営されたので、總裁政府とよばれる。一七九九年十一月九日、つまりブリュメール十八日のナポレオンによるクーデタまで約四年間つづいた）が命じた動員令により、

フーリエール管区に割当てられたものである。当時フランス軍は、イタリアではオーストリア軍に、ドイツではプロシヤ軍に破れ、またスイスでは、フランス征服の夢をいだく將軍スワロフ麾下のロシア軍におびやかされていたのである。かかるフランス軍にたいし至急援助の手をさしのべるべく、政府は一億の金と十萬の兵とを必要としていたのだ。ヴァンデの名で知られている西部地方の諸県や、ブルターニュおよびバス・ノルマンディの一部といった地域は、四年にわたる戦闘のすえ、オシュ將軍の尽力によってここ三年来平穩をたもってきたが、この機に乗じて戦闘を再開したようである。各方面からの侵略に直面して、共和國は初期の精力をとりもどした。まず攻撃をうけている県の防衛にそなえるとともに、前述のメッシドル十日の法令の一条項にもとづき、各県の防衛の任務をその地方在住の愛國者の手にゆだねた。実をいえば、国内で自由にできる軍隊も金ももっていなかった政府は、法律上のやりくりによって困難を回避したのだ。つまり、反乱をおこした諸県になにも送ることができないので、政府は、県のことには県にまかせきりにすることにしたのである。おそらくは、こうした手段によって市民たちを対立、武装させることによって、あわよくば反乱の息の根をとめようと考えていたのかもしれぬ。問題の条項は、やがて悲惨な仕返しを招くきっかけとなったのだが、つぎのように命じていた。「西部諸県は義勇部隊を組織すべし」この政治性を欠いた条項は、西部地方にきわめてつよい反感を生ぜしめる結果

となったため、總裁政府も一挙にその反感をしずめることは断念した。そこで政府は二、三日後に議會にたいし、義勇部隊の結成をみとめた条項によって割当てられた兵員補充にかんして、特別措置を要求した。そのため、この物語のはじまる数日前に公布され、共和國第七年の補充第三日（一九一九年九月十九日）に実施された新しい法律によって、これら徵募兵を國民軍に編成するよう定められた。これら國民軍はサルト、オルヌ、マイエンヌ、イル・エ・ヴィレーヌ、モルビアン、ロワール・アンフエリユール、メーヌ・エ・ロワールなどの県の名をとることになっていた。その新しい法律はつぎのように規定している。

「これら國民軍は、特にふくろう党とたたかうために用いられるものであり、いかなる理由によっても国境方面に移動せしめることはできない」

この退屈なしかし一般にあまり知られていない細かな規定こそ、總裁政府のおちいついていた無力な状態と、いま政府軍に引率されていく一群のものの足どりと、この二つを同時に説明するものだ。だからさらにもう一つ、つぎのようにつけくわえておくのも、おそらくむだではあるまい。すなわち、總裁政府のかかるみごとな愛國的決定も、ただ法例集に記載されるだけで、それ以外になんら実施をみることはなかったのである。共和國の政令も、かつてはすぐれた道徳的觀念、愛國心あるいは恐怖政治などのおかげで施行力をもっていたのに、いまではそのような支えを失ってしまつたため、何百万の金や兵隊をいくら机上でつく

りだしてみても、実際に国庫や軍隊に入ってくるものといったら無にひとしかったのである。大革命のバネは、無能な人間の手のなかですっかり弱まってしまっていた。それゆえ法律もその適用にあたって、状況を支配するのではなくて、逆に状況に支配されるというようになつたのだ。

当時マイエンスとイル・エ・ヴィレーヌの二県は、一人の老士官の指揮をうけていた。好機の到来をたちどころに見ぬいた彼は、ブルターニュ地方、ことにふくろう党反乱のもっともおそるべき拠点の一つたるフーリエールから、自分に割当てられた徴募兵をかり集めようと決心したのだ。それによってこの不穏な地方の勢力を弱めることができるかもしれない、と思つたのだ。この献身的な軍人は法令にかかれた空想的な予測を利用して、徴募兵にはただちに装備と武器を支給すること、および、政府がこの不正規の軍隊に約束した給料の一月分を支払う用意がある旨を公布した。当時ブルターニュ地方はいかなる種類の兵役をもこぼんでいたが、このやり方は、その約束が信用されて、たちまち成功した。その成功のはやさにはその士官自身がおどろいたほどだ。しかし彼は、そう簡単にはだまされぬ古参の軍人であつた。応募者の一部が地区本部に殺到してくるのを見たたん、こんなにはやく集まってくるのには、何かひそかな動機があるのではないか、と疑つたのである。この連中の目的は武器を手に入れることなのだ、とにらんだ彼の推察は、おそらく正しかったろう。そこで

彼は遅参者をまたずに、すでに平定された地方に近づく目的で、アランソン方面に後退するための手段を講じた。もつともこの計画の成功は、これら地方の反乱が激化したためきわめてあやしかった。この士官はあたえられた指令をまもつて、フランス軍の敗退やヴァンデ地方からの不安な情報についてはいっさい語らなかつた。

こういつたわけで彼は、この物語のはじまつた午前中に、強行軍によつてマイエンスに到着しようところみたのである。ひとたびマイエンスに着けば自分の思いどおりに法令を実施し、ブルターニュ人の新兵でもつて自己の連隊を補充するつもりだった。ところで、その後よく知られるようになった新兵(*conscriit*)という言葉は、元来共和国の新募兵につけられていた徴募兵(*requisitionnaire*)という名のかわりに、このときはじめて法律文書で用いられたいものである。フーリエールを出発するにあたりこの指揮官は、道のりの長さを新兵に気づられないように、こっそりと自分の部下の兵隊にだけは、全員に必要な薬包と給食用パンとを携帯させておいた。エルネの宿場には停止しないつもりだった。そこで停止すれば、落着きをとりもどした徴募兵たちが、近くの山岳地帯にちらばっているはずのふくろう党員と共謀するおそれがあったからだ。彼らはこの老共和主義者の策に面くらつたようだったが、その一行にただよう陰うつな沈黙、山をのぼる足どりのろさなど、このユロという名の連隊長の疑惑を極度にかきたてた。今まで私が描写してきたことのうち、もつとも特異な

点に、彼はすっかり心をうばわれており、随行の五名の若い士官たちの間にはさまれて、黙りこくって歩いていったが、士官たちもみな敬意をはらって、考えこんでいる指揮官をそっとしておいた。だが、ペルリーヌの頂上までくると、ユロは本能的にくるりとふり返り、徴募兵たちの不安げな顔つきを観察すると、時をうつさず沈黙をやぶった。事実、これらブルターニュ人は徐々におくられていったため、護送隊とのあいだはすでに約二百歩もひらいていたのだ。そのとき、ユロは彼独特のしかめ面をみせた。

「あのめかしや連中、いったいどうしたんだ」と彼はよくひびく声でさげんだ。「新兵の奴ら、脚を開くかわりに、閉じてるんだろ、きつと」(ミユスカダンとはフランス革命期にしゃれた格好をしていた王政主義者)

この言葉に随行の士官たちは、とつぜんの物音にはね起きたように、びくっとしてふり向いた。軍曹や伍長らがそれをまねた。で中隊は、待望の「止まれ！」の号令がかかるのも待たずに停止した。士官たちはまず、長くのびた亀のようにのろのろとペルリーヌ山をのぼってくる隊列のほうをながめやったが、たちまち眼前にひらける光景に氣をうばわれてしまった、ユロが口にしたことの重大さにも気づかぬまま返事もせずにいた。彼らもまた他の多くの青年同様、祖国防衛のために優秀な研究生活からひき抜かれてきたのだったが、戦場にあっても芸術にたいする感覚を失ってはいなかったのである。いま眼前にあらわれた景色の大観は、フージェールからでも同じように望まれはしたが、見る地点が変れば趣きも異なり、彼らはもう一度とっ

くり眺めたいという氣持を禁じえないのだった。ちょうど音楽愛好家にとって、ある曲の細部に通じれば通じるほど、そこに味わわれる楽しさもふえてくるというのと同じである。

ペルリーヌの頂きに立つ旅人の目には、クエノンの大峡谷が姿をあらわす。その峡谷をとりまく山の一つの地平線上に、フージェールの町が位置している。その町の城は、それが位置する岩山のうえから三つないし四つの重要な道路を圧しており、その地形によって、かつてブルターニュ地方の要害地の一つとされていた。士官たちのいま立っている地点からは、地味の肥沃さの点でもまた眺めの多様さの点でも群をぬいているこの峡谷の全体を、一望のもとにおさめることができた。まわりには、片岩の山々がぐるっとすり鉢型にそそり立っている。赤茶けた山腹はカシワのしげみにおおわれ、斜面にはひんやりとした谷がかくされている。この岩山の外観は円環状の広大な屏風型をなしており、その底にイギリス式庭園のように自然をそのままかたどった広い草原が、なだらかにひろがっている。大小さまざまな相続領地がほうぼうにあり、いずれも木が植えてあるが、その領地は生垣で囲いがしてあって、それがこの緑のじゅうたんに、フランスの風景のうちでもほかに類のない外観をあたえている。そしてそこには、さまざまな対照のうちにゆたかな美の秘密がかくされていて、どんなに無感覚な心でも、その対照の生む効果の大きさには感動せずにおられない。

ちようどいまこの地方の眺めは、自然がときおりみずからの不滅の被造物の姿をひきたてるのに好んで用いる、あの東の間の輝きによってさらに精彩をましていた。分遣隊が谷をわたっているあいだに朝日が、九月の朝に草原にたなびくあの白いうすもやをゆっくりと散らしたのである。

そしていま、兵隊たちがふり返ったちようどそのとき、ある見えざる手が、この風景を覆っていたヴェールの最後の一枚をとりのぞこうとしているかのようだった。そのうすもやは、高価な宝石をかくして好奇心をそる、あの半透明の紗の覆いのようだった。士官たちが見たす広い地平線一帯にかけて、空には、その銀色の輝きによってこの碧い大穹窿を本当に空だと思わせる、わずかな雲もみられなかった。空はむしろ、峰々の稜線に支えられ、烟や草原や小川や木立のすばらしい集まりをかばうため空中からつるされた、絹の天蓋とでもいふべきだった。

士官たちは、かずかずの田園美にあふれるこの風景をあかずながめつづけた。あるものは、かなりのあいだあちこちと目をさまよわせたあげく、色とりどりの木立のあいだに視線を落ち着かせた。そこでは黄ばんだ木の葉の色が、その他の青銅色と対照をなしており、さらにその木立全体が、ところどころ刈りとられた草原のエメラルド色のために浮きあがって見えるのだった。またあるものは、刈りたったゾバを野営地の叉銃のように円錐状に束ねてある烟の赤茶けた色と、収穫のすんだライ麦畑の黄金色との、色彩の対照に見とれていた。あちこちに白い煙のあがっている

くすんだ色のスレート屋根、曲りくねったクエノン川がえがく銀色にかがやく水路、これらが視線をとらえては、しらずしらずのうちに心をぼんやりした夢想にみちびくのだった。すがすがしい秋風は芳香にみち、さらにつよい森のにおいも加わってまるで香のように、未知の花、たくましい植物、隣国イギリス（ブルターニュという名はこの二つの国に共通している）にひけをとらぬ草木の緑など、この地方の美しい景色に見とれている人びとを陶醉させるのだった。何頭かの家畜が、すでにかくも劇的なこの情景にさらに生氣をあたえていた。小鳥がさえずり、それが谷間にこだまして甘美な、内にこもった旋律をなして空中にふるえている。光と影のゆたかなたわむれ、ぼうっとかすんだ山の端、あるいは林のなかの空地だとか、水の流れたとか、なまめかしいくねくねした線だとか、こうしたところから生まれる幻想的な展望——もし、想像力を集中してこれらのものをそっくり思いえがいてみたいなら、あるいは、も少し、描いたと思ったとたんに消えさるその素描に、いわば追憶の絵具をぬってみるなら、これらの光景になんらかの価値をみとめる人びとは、いま、青年士官たちのまだ感受性を失っておらぬ魂を不意にとらえたこの靈妙な光景について、不完全ながらも一つのイメージをいだくことができるだろう。

士官たちは、これらあわれな人間どもはいやいやながら自分の故郷となつかしい風習とをすてて、おそらくは異国の土地で死ぬことになるのだと思うと、のろのろしている

のもむりはないと、つい大目にみてやった。この寛大な処置をごま化すために士官たちは、いかにも軍人らしい思いやりから、自分たちはこの美しい景色を軍事的観点から検討しているのだ、といったかつこうをしめした。しかしユロ（彼に連隊長などというあまり語調の美しくない肩書をあたえるのをさけるために、指揮官と呼ぶ必要があるが）——そのユロは、危険がさしせまった際に、たとえ地上楽園の魅力であれ、いやしくも風景の魅力などに心をうばわれるような軍人ではなかった。で彼は「否」といわんばかりに首をふり、その容貌にかめしい表情をあたえている太い黒い眉をしかめた。

「いったい、どうしてぐずぐずしてやがるんだ」と戦闘の疲労のためにしわがれた声で、彼はもう一度たずねた。「村にかわいい娘でもいて、握手でもしているのかい」
「わけをおたずねですかね？」とある声がこたえた。

その声は、このあたりの谷間に住む農民が羊の群れを集めるのに用いる角笛の音のようだった。それを耳にしたとたん、指揮官はまるで刀の切先きに触れてもしたように、きつとふり返った。と、二、三步はなれたところに、共和国に仕えるためマイエンスに連行されていくこの連中のうちの、だれよりも奇妙な人物が目にとまった。肩はばがひろく、ずんぐりしていて、頭は牛の頭ほどの大きさである。牛に似ているのは頭だけではない。肉の厚い鼻孔のため、鼻は実際よりもさらに低くみえる。めくれあがって、雪のように白い歯をのぞかせている唇、威嚇するような眉

のしたの黒いぎよろりとした目玉、たれさがった耳、赤茶けた髪。これらはわれわれ白色人種のものというよりは、むしろ草食動物のものだった。最後に、社会人としてのその他の特徴がまったく欠けていて、それがこのむきだしの頭をさらに特異なものにしていた。顔は日にやけて青銅色をおび、骨ばってごつごつしたその輪郭は、この地方の土壤を構成している花崗岩（かんざん）を思わせるものがあつた。この奇妙な人物のからだのうちで目にみえる部分といえ、この顔だけである。首から下は、赤茶けた布のブラウスのような上着に包まれていたが、その生地は、もつともみすばらしい新兵のズボンのそれよりもさらに粗末なものだった。この上着は、古代ゴール人の着ていた短マント（サガール）あるいはセイヨン（seylon）そっくりのもので、腰のあたりまでしかなく、まだあちこちに樹皮のついているあらけずりの木片によつて、二枚の山羊の毛皮に結びつけられてあつた。この地方でビツクとよばれる牝山羊の毛皮が腰からしたを包んでいるのだが、その部分にはすこしも人間らしい形はみとめられなかった。でかい木靴が足をかくしている。着ている山羊の毛皮とよく似たつややかな長い髪は真ん中で分けられ、顔の両側にたれさがっている。それは、今もなおどこかの寺院でみられる中世の彫像の髪を思わせた。新兵たちが肩にかついでいるふしくれた棒のかわりに、彼は太いむちを銃のようにして胸にだきしめていた。そのむちのたくみに編まれた皮ひもは、ふつうのものの二倍の長さはあるようだった。